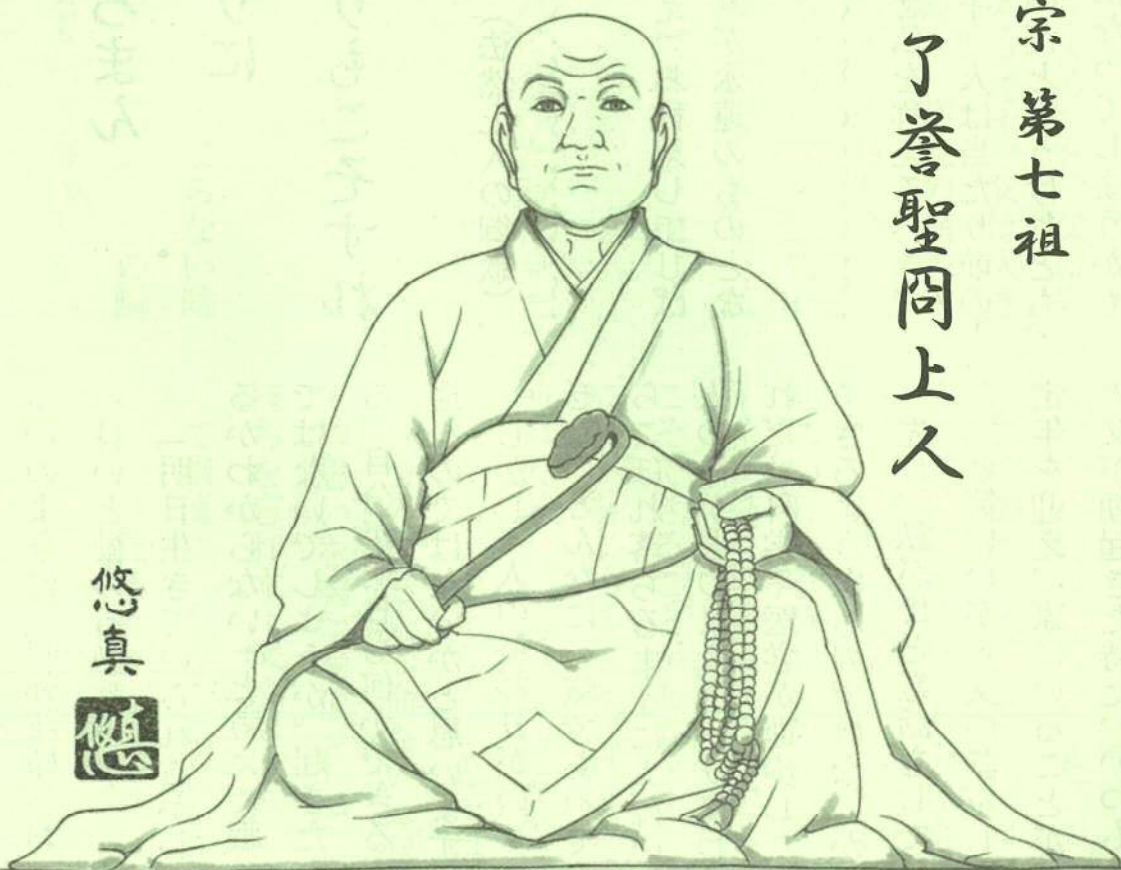


みおしえ



浄土宗第七祖

了譽聖阿上人



悠真



令和6年に浄土宗は開宗850年を迎えます。

埼玉教区浄土宗青年会

<http://www.saijousei.com>

阿弥陀仏と

十声称えてまどろまん

ながき眠りに

なりもこそすれ

(法然上人の御歌)

【意味】

南無阿弥陀仏と十声（とこえ）お称えしてしばし眠るとしましょう。この眠りが永遠のものとなるかもしれませんから。

これは眠りに入る前に、お念仏を称えるべきであるという法然上人の御歌です。人は当たり前のように眠って、明日は起きるのだと思うけれども、それがそのまま最後の眠りになってしまうかも

しれない。だから必ず眠るときには最後の日であるかのように、阿弥陀様へお念仏をお称えした方が良いと勧める御歌です。

「明日生きていられるかわからない、起きられるかわからない」と考えて眠る人はまずいないのではないだろうか。起きたらあれをしてこれする。自分が明日も何かできると想像することが普通なのではないかと思えます。

しかし、人の終わりがいつ来るのかはわかりません。どんなに元気であっても、ぽろっと何かからこぼれ落ちるように人はいなくなってしまう。人の命がどのように移り変わっていくのかは、どれだけ科学や医学が進歩したとしても、人が理解できるようなものではないかと思えます。

先日、私が母と電話をしていた時、「ああ、そうだ」と笑いながら父の話をしてくれました。父は定年を迎え、家にいることが多くなりました。その父が朝起きた時に、いつも感じる想いがあるそ

うです。私はそれを聞いて思わず愕然としました。「ああ、良かった。まだ生きてる」と、父は安心して生きている自分を喜ぶそうです。父は大きな病気を抱えているわけでもなく、病院の検査でも異常はありません。父よりも年上の方が老いを感じさせず、元気に働いている世の中です。明日起きたら父が生きていない世界になるなんて、私は全く考えていませんでしたが、ふと思いついたことがあります。

実家に帰り、父を温泉に連れて行った時に見た背中、ずっと小さくなっていました。やせ細っていて、肌もシワがたくさん浮かんでいました。私は胸が詰まる思いがしました。それは電話で父の話聞いた時と同じ思いでした。

誰だっけいつかは死んでしまう。止まらない時間と一緒に人は移り変わって老いていく。その瞬間、その瞬間を共に生きているという尊さを知っていたはず、けれども、いつまでも変わらずに続

くと思ってしまった自分がいたのです。とんでもない勘違いでした。

この法然上人の御歌は、自分自身のためでもあ
るし、またその人が出会う全ての人に対する言葉
でもあると思います。限りある命だからこそ、一
緒にいられる時間も限られています。いつかやろ
う、いつでもできるではなく、今生きているから
こそできることがあります。阿弥陀様やご先祖様
に思いをよせること、自分を支えてくれる当たり
前の人達へ感謝の気持ちを行動や言葉で表すこ
と、今しかできないことではないでしょうか。

自分の命も人の命もいつ尽きるかわからない。
その思いを胸に僧侶として私は阿弥陀様への気
持ちを忘れず、父や母と話せる限りある時間、そ
して素直に「ありがとう」と伝えることを大事に
していけたらと思います。

合掌

執筆 蓮馨寺 紺野 舜介

表紙の解説 聖岡上人（しょうがいしようにん）

南北朝時代から室町時代中期の僧 浄土宗第七祖 号は西蓮社了誉

曆応四年（一三四一）常陸国久慈郡巖瀬（現在の茨城県常陸大宮

市）の城主白石志摩守宗義の子として誕生、幼名を文殊丸という。

五歳の時、父宗義が戦で非業の死を遂げ、八歳の時、父の菩提を弔

うために瓜連常福寺・了実上人について出家剃髪し、聖岡という名

を与えられた。一八歳で箕田の浄土宗第五祖定慧上人について浄土

宗義の指南を受け、二五歳で二祖三代の宗義行業ならびに円頓、布

薩の大戒などの全てを伝授された。当時の浄土宗勢の実際は、天龍

寺の僧、夢窓疎石の「浄土宗は小乗であつて大乘ではない。」とい

う批判などを受けて、故意に低く受けとられる傾向があつた。それ

を嘆かれた聖岡上人は、尚一層のご修行と勉学に励み、広く仏教全

般を学ばれ、更には神道・和歌にも深く通じた。説法の言葉も鋭利

で、諸宗学者から注目をあびた。その結果、各宗に対する浄土宗の

地位があがり、退嬰的な風潮を転換させた功績は大きい。功績中大

きなもの、伝法制度の確立である。浄土宗の僧となる為には、必

ず宗戒両脈を相伝しなければならぬと規定して、宗徒養成の為に

伝法の儀式を整備し、五重相伝の法を定めた。晩年は、弟子の聖聡

上人（浄土宗第八祖・増上寺開山）の請いにより小石川に草庵（現

在の伝通院）を結んで移り住み、応永二十七年（一四二〇）九月二十

七日、八〇歳でご往生された。上人は額に「三日月」の相があり通称

三日月上人とも称された。

解説執筆 西雲寺 室田 巴道

台掌

聖岡上人鑽仰和讃

蓮池光洋 作詞

松濤基 作曲

一、常陸の国は 岩瀬城 久慈川ほとりに

生まれいづ 了実六祖を 師と仰ぎ

念仏の道 精みゆく 五重の祖師や 六夜尊

二、浄土の教え 受け継がれ 三國伝来 列祖伝

著書もあまたの 学徳僧 広がる念仏に

矢判さるも 寓宗の声 くつがえす



発行 埼玉教区浄土宗青年会

会 長 吉水 大順
広報編集局長 加藤 健一

無断複写を禁止します